不定期刊行　　第 496 号　2013.08.29

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

松本県ヶ丘高校の夏合宿　2

暑い中でのブナ立て尾根の登りであるが、割合と順調な出だしであった。久しぶりの山行の女子のＭさんも遅れずについて行く。さすがに三角点手前で音を上げたが、夕食の食材を男子のザックに移して何とか登り切った。７月の白馬山行では常に遅れた１年のＹ君もゆっくりペースに助けられた様子であった。テント設営後烏帽子岳に向かったが、ニセ烏帽子でＭさんがダウン、青柳Ｔが付き添ってテントに引き返した。残りの生徒は元気に進む。ニセ烏帽子の下りで常駐隊の小谷の宮島さんと会い挨拶を交わした。その間に先行した生徒に烏帽子の頂上直下で追いつき頂上からの眺めを堪能。分岐まで戻り、天気図作成の生徒に天場まで走らせ、残りは４８池散策に。クマ情報があり嫌らしかったが、散策を充分に楽しみテント場に帰った。小屋で再び宮島さんらと情報交換。明日(18 日)が常駐隊の解隊式とのことで、野口五郎に行っている田中隊長と一緒に下るとのことであった。

テントでの夕食時、Ｍさんは割合元気であったが、例の水 10L のＴ君が頭が痛いと言い出した。とりあえず早く寝るように指示して就寝。ところが片方のテントが 22 時過ぎまで騒いでいて小生の怒りを買うこととなった。朝食のメニューはうどん、ただし乾麺を茹でてその茹で汁に味をつけるという恐ろしい調理法でとても食えたものでは無い。小生は一口で返品、大量に残ったうどんを何人かが「オウェー！」を連発しながら片付けていた。食後の片付け中、例のＴ君が頭が痛いので帰りたいと言い出した。それを聞いたＭさんが偏頭痛が出たのでやはり帰りたいと言い出した。しかもこの２人は昨夜騒いでいて小生にどやされた４人のうちに含まれていた。その事を怒ってみても始まらないし、生徒だけで返すわけにもいかず、かと云って青柳Ｔに降りられたら１人ではこの先心許ない。そこで小屋に行き常駐隊の宮島さんに状況を説明して２人を連れて降って貰えないかと相談したところ、快諾が得られたので合宿を続けることが出来た。

絶好の上天気の中、１０人になったパーティーは野口五郎岳に向けて歩を進める。夏山シーズンの終わり頃であるが、それなりに登山者は居る。途中田中北部常駐隊長にあい挨拶を交わした。小屋で水を補給したりバッジを買ったりしてから頂上に。今日最初の百名山山頂でゆっくりした。ところが降りだして直ぐに１年のＹ君がスリップして転倒。直ぐ立ち上がらないのでどうしたと思ったら足をひねったという。（彼は県大会の折にも転倒捻挫してチームは棄権となっている）ここで縦走は終わりかぁー！と覚悟したが、痛いが歩けるとのことなので進むこととした。歩行速度は多少落ちたものの、それでも中高年グループより速いペースで進む。水晶小屋には予定より約１時間遅れで到着。折角だからとＹ君を残して水晶岳のピークハントに出かける。本日２つめの百名山頂上から 360 度の眺望を堪能する。ところが小屋まで戻ったところ、Ｙ君の足首の腫れがひどく、痛みもあるので、これから野口五郎岳小屋に戻り泊まって明日大町へ帰りたいと言い出した。パーティーを割るわけにもいかず、戻るより三俣山荘に行った方が遙かに楽なはずである。それに三俣山荘の診療所はまだ開設していて一応診断を受けることが

出来る。Y 君は青柳 T 引率で源流経由で三俣小屋へ(約２時間)、先着するはずだから診療所で受診する。その他のメンバーは鷲羽岳(本日３つ目の百名山)経由で三俣小屋へ(約３時間)、として一部別行動とした。ところが小屋に着いてみても二人が到着している様子が無い。テント泊の手続きをして CL,SL の二人に探しに行くように指示。やはりけが人を引率するのはルートを知っているものの方が良いと痛感する。二人は程なく到着し診療所の見立ても捻挫とのことであった。

Y 君は小生引率で小池新道経由で新穂高へ下山することとし、残りのメンバーの対応に苦慮した。青柳Ｔに一人引率になるが予定のコースを引率できないかと打診したが、了解して貰えず、苦渋の選択であるが、全員で新穂高への下山を決意した。無理をすることは無い、山は逃げない。それよりパーティーを裂くという愚は避けるべきという決断である。双六小屋から鏡平経由の小池新道は乗鞍青年の家勤務時代に何回も通っているので勝手知ったる道である。三俣小屋からでも８時間ほどで到着できそうである。最悪の場合はわさび平でもう一泊すれば良い。Y 君も痛い足を我慢しながらそこそこのペースで歩いてくれ、途中の鏡平で景色を堪能する余裕まであった。新穂高から平湯でバスを乗り継ぎ、17:30 松本駅に帰着し、不完全燃焼ながら今年の夏山合宿を終えた。

小生の 30 年間の山岳部顧問歴の中で、夏山縦走を途中で打ち切ったのは、今回が２回目である。前回は 10 年以上前の大町高校時代の後立山縦走、栂池から針ノ木までの計画が、生徒の食材忘れのため、五竜で打ち切って遠見尾根を下山したことがあった。絶好の上天気の中、五竜岳の頂上から鹿島槍、爺ヶ岳他の南の峰々を何時までも諦めきれずに恨めしく眺めていたことを思い出した。(当日の朝、今夜以後の食材を全て忘れました。予備食も忘れました。と打ち明けられたときのショックは大変なものでした。)

全国高校総体登山大会で入賞できるチームを作ることが出来たが、たかだか３泊４日の夏山縦走を完結できない山岳部の顧問であったことを反省している。全国大会で多くの監督が多くの監督が大会後夏山合宿に行く話をしていたが、羨ましいと思う程度であった。夏休みの短さを理由にして、高校山岳部の活動の華は夏山縦走、という文化を伝えられなかったことが悔やまれる。遅ればせながらあと半年の顧問生活に、今まで小生が学んだ山の対する全知全能を高校生に伝えることに全力を傾けたいと思っている。

編集子のひとりごと

松田さんの百面相が目に浮かぶような合宿報告。高校生を連れて行くということは、こういうことなんだよなぁと改めて納得。自ら言うように、山岳部顧問として最後を飾るべく、また高校山岳部に夏山縦走の文化を伝えるべく、7 年ぶりに計画した合宿。天気も上々、素晴しい山報告になるはずが、トラブル続出、ずっこけて「かなりほろ苦い」体験になるとは、予想だにしなかったことだろう。しかし、そんな縦走をよくぞオープンにしてくれましたと、松田さんにはお礼を申し上げたい。僕は前号にも書いたが、恐らく松田さんとは最も回数多く山に登っている一人だと自認している。それだけに、松田さんのこの合宿中の様々な出来事への対応は大いに共感できることばかり。そして、それらを総括した文末のことばは、一人自分に向けられたものではなく、これから山岳部を育てていく我々へのエール、メッセージだと思って受け止めている。高校山岳部の活動の華は夏山縦走という文化は、僕らが今度は伝える番なのだろう。そんなことを思いつつ、同時にある意味ニヤリとしながら読ませてもらったのであった。(大西　記)